

小池辰雄記念図書室だより

2017. 10. 2(月) NO.39

千葉県若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

「小池辰雄往生記念会に参加して」

江戸 梯子(余市)

第一回小池辰雄往生記念会は、忌日の 8 月 29 日(火)に恵泉祈りの家を会場に、札幌キリスト召団余市教会が主宰で行われました。テーマは「到達点を絶えず確認し合う、無の理解」でした。参加者は、余市、札幌、小樽、帯広の召団員と恵泉塾生で、総勢 72 名でした。司会は木下 肇師でした。会は第一部と第二部に分かれ、第一部は召団讃歌斉唱、「君は葡萄樹」「札幌キリスト召団讃歌」でスタートし、講演は「先生から託された霊的遺産」をテーマに水谷幹夫師がスピーチしてくださいました。第二部の読書会は、小池辰雄の[キリスト告白録]第二巻『霊の貧者』をテキストに、水谷幹夫師が会を進めてくださいました。

「江戸 梯子さま

8/20 の小池辰雄往生記念会 in 都賀で、水谷先生が愛をこめて、師との霊的交わりを語ってください、私も胸に迫るものがありました。ご参加くださいまして、ともに良い時間を持つことができたこと、感謝でいっぱいです。会場に飾られた似顔絵も、照れ屋の父が、すみっこではほえんでいるかのようなようでした。この似顔絵のたくらみをした人は、私が長年おつきあいをしている友人で、ナギカツオさんです。8 月 1 日に最愛の妻(上條滝子さん=絵本作家)を天に送られました。辰雄の講演会(1988 年 10 月 15 日・武蔵野公会堂)にも来られ、教会は吉祥寺緑教会に属しておられます。

この絵の中に、in 余市、8/29(往生記念日)とサインがありますので、余市の記念会にも、片隅に飾っていただきたく、急ぎ送ります。

8/21 小池牧子」

上記の手紙と共に小池辰雄先生の似顔絵は、当日講壇のすぐ後ろにある、ホワイトボードの右上に掛けられました。水谷先生は似顔絵を背に挨拶をされ、冒頭に述べられたのは「札幌召団は、小池先生(社長)が作り、水谷(番頭)は忘れてもよいが、小池先生(社長)のことは忘れないように、志を絶えず思い出し、先生の願っていること、先生の独自の信仰を思い出してほしい」

ということでした。私は、その言葉を聞いたとき、水谷先生の謙遜な立ち位置を垣間見、この姿勢を神様が祝福して下さっていると思いました。

札幌キリスト召団では、2018 年から毎年 2 月はオリーブ山教会で小池辰雄誕生記念会を、8 月は余市教会で小池辰雄往生記念会を行うことになりました。記念会を通して小池先生を思い出し、信仰の原点に戻ることができ、魂の故郷に帰れることは主の恵みです。感謝します。



小池辰雄を読む会

●余市「無の神学」

2017 年 10 月 1 日(日) 13:30~15:00

2017 年 11 月 5 日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌「無者キリスト」

2017 年 11 月 4 日(土) 13:30~15:00

札幌市南区川沿 10 条 3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都賀「聖書の人ルター」

2017 年 10 月 21 日(土) 10:00~12:00

2017 年 11 月 18 日(土) 10:00~12:00

千葉県若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5F

*会費:1000 円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

図書室便りは隔月発行です。

小池辰雄伝

その 39

小池牧子

(小池信雄と交互に執筆します)

妻順子の二足のわらじ

今から 52 年前、1965 年 9 月 29 日は小池信雄と依田牧子の結婚式が行われた日。信雄の父辰雄が司式をし、厳粛な空気の中で真新しい聖書の扉に、辰雄と二人がサインをした。辰雄はこの日、「信愛一如 天鐘」(写真)という文字をアルバムに残している。

信愛一如。息子・信雄の「信」を使った四字熟語である。若い二人(26 歳と 23 歳)をキリストの中に導こうとする父親の祈りだったことが、今はわかる。



前の年の 2 月、東大教授を定年となり、晴れて自由の身になったものの、辰雄はすぐさま 4 月から第二の人生を、埼玉県の獨協大学という教壇に移している。

「1965 年 9 月 22 日をもってキリストの幕屋・武蔵野福音集会は 25 周年を迎えた。定期的な日曜集会、祈祷会、地方伝道集会、清瀬集会、夏季特別集会、講演会などを合算すれば千数百回の集会をもったことになる。延べ数万人の人がこれにつらなり、数千名がこれを聞いたであろう。しかし召されたる者はどれほどであるか。第一回からの会員は妻の順子ひとりである。」

これは『キリストの福音』(曠愛新書 第 5 号＝伝道 25 周年記念 1966 年 3 月 31 日発行)の「武蔵野だより」に残された辰雄の言葉だが、まさに寂寥の思いではないか。

吉祥寺の自宅はそれまで古めかしい家だったが、長男・信雄と牧子の新居、そして、次女・歌子と弘康の新居として改築する必要があった。しかし自宅改築中でも、大切な日曜集会を休むわけにいかない。そのため日曜集会を、1964 年 4 月から代々木・婦選会館の 3 階の会議室に移し、武蔵野

幕屋新宿集会として「マルコ伝」を辰雄が講じている。

なぜ婦選会館か？そこは誰だろう、妻・順子の顔が効く場所だったのだ。婦選会館は、日本の婦人参政権運動を主導した婦人運動家・市川房枝が 1946 年に建てた。

小池順子と婦選会館の関係は、戦後間もない PTA 活動にさかのぼる。長男が入学した地元の小学校は、戦争の傷跡の残る劣悪な校舎だった。市にかけ合えば「予算がない」と一蹴され、「いったい役所の金はどう使われているか、みんなで勉強してみよう」と、当時、政治浄化・福祉の充実の指導的立場にあった市川房枝を婦選会館に訪ねたのだった。

子どもの教育環境を改善したい一心でとび込んだ順子が、日本婦人有権者同盟会長に抜擢され、市川房枝を支えて政治啓発運動を担うことになる。そして 1953 年、1959 年、1965 年と 3 連続で、市川房枝を「理想選挙」で参院選に当選させた。

その彼女の活動拠点の一隅に、武蔵野幕屋が 2 年ほど間借りしていたということになる。「家内はねえ、市川先生のところのお手伝いに行っていてね。私はいつも留守番で…」と、来客があると、気まり悪そうに言い訳をする辰雄であった。その順子は「今日も婦選会館ですからね」と言って、手を辰雄の方に差し出し、辰雄はその手になにがしかのカンパを渡すため、ポケットを探るのだ。

「二足のわらじ」を履いた順子、うちに外に、辰雄を支えた賢女であった。



喜びの人々と市川房枝(左から 5 人目)と小池順子(右端)
1965 年 7 月 5 日